

或る「小倉日記」伝

映画文学人生論

松本清張 (1899-1972)
『或る「小倉日記」伝』(1925) 「文芸時代」
『雪国』(1935-1947) 「文芸春秋」ほか
『眠れる美女』(1960) 「新潮」
『美しい日本の私』(1968) 「記念講演」

鈴の音が聞こえる

田上耕作は六歳になっても、言葉がはっきりしない子で、口をだらりとあけたまま。涎をたらした。そのうえ、片足の自由がきかず、足をひきずるように歩いた。医者にみせても、病名は不明で、治療の方法はないという。

誰が見ても白痴のように思えたが、頭脳は人並以上で、小学校でも、私立の中学校でもズバ抜けた成績をとって、母親のふじを喜ばせた、

ふじは夫が病死したときはまだ三十歳、高雅な美貌の持主だったが、再縁の話が諸処から持ち込まれても、すべて断り、ひとりで耕作を育てた。

学校の成績がよかったことは、耕作自身にも多少、世間に対して、自信らしいものをつけさせ、不具者がもつ、ひげ目な暗い気持から救った。彼は文学書を好んで読むようになった。

なかでも友人の文学青年から借りて読んだ森鷗外の『孤独』は、その中の文章がはからずも彼の心を打った。あまり感動が大きくて、数日はそればかりが頭を離れなかった。

外はいつか雪になる。をりをり足を刻んで駆けて通る伝便（でんびん）の鈴の音がする。

伝便とは走り使いの便のことで、鈴を鳴らしながら相手に郵便物を届ける。明治の頃、東京よりも先に九州の小倉に輸入された風俗だ。



或る「小倉日記」伝

映画文学人生論

幼児の記憶がよみあがる。耕作は枕に顔をうずめて、鈴の音がかぼそく消えるまでを聞くのが好きだった。それは子供心に甘い感傷を誘った。でんぴんやのじいさんの家にはお末ちゃんという女の子がいて、耕作はよく一緒に遊んだ。眼の大きい、色の白いおとなしい子だった。

昭和十三年に出版された『鷗外全集』第二十四巻後記は鷗外の小倉時代の日記の散逸したしだいを載せている。小倉に赴任した明治三十二年六月から約三年間の日記だ。それを読んだ時、耕作の心はひらめいた。当時の鷗外の知人を訪ねて話を聞き、失われた日記に代えようという着想だ。

昭和二十五年の暮になって、田上耕作は衰弱がひどくなり、「鈴の音が聞こえる」と母に言い残して死んだ。鷗外の『小倉日記』が東京で発見されたのはその翌年である。この事実を知らずに耕作が死んだのは、不幸か幸福かわからない。

生前のある日、疲れて家に帰ると、意外な人から手紙がきていたことがある。それは鷗外の弟の森潤三郎からで、「貴下のご調査で差し支えなくばご高教を仰ぎたい」という文面だった。

昭和十七年刊の森潤三郎著『鷗外森林太郎』には、「小倉市博労町の田上耕作氏は、在任中の兄の事績を調べておられる」とある。森潤三郎と松本清張のおかげで田上耕作の名は不朽となった。

九州の雪は冬の夕立なりともいふべきにや 鷗外